

複式学級指導

Q & A

鹿児島大学准教授
原田 義則

- 1 初めて複式学級の指導をします。どのように取り組めばよいでしょうか？
- 2 複式学級指導の特徴は何ですか？
- 3 複式学級の学習指導には、どのような形態がありますか？
- 4 小学校国語科における一単位時間の展開として、どのようにすることが考えられますか？
- 5 「話すこと・聞くこと」の指導では、どんなことに気を付けるとよいでしょうか？
- 6 「書くこと」の指導では、どんなことに気を付けるとよいでしょうか？
- 7 「読むこと」の指導では、どんなことに気を付けるとよいでしょうか？
- 8 少人数での学びでも、多様な考え方に触れ、深い学びを実現するための教材・教具の工夫には、どのようなものが考えられますか？
- 9 少人数での学びでも、語彙力・表現力を高めるためには、どのような工夫をするとよいでしょうか？
- 10 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、複式学級指導で特に配慮すべきことはありますか？
- 11 現在、「個別最適な学びと協働的な学びの実現」が強調されていますが、複式学級において実現することが可能ですか？

Q1 初めて複式学級の指導をします。どのように取り組めばよいのでしょうか？

【解説】

「令和元年度学校基本調査」（文部科学省 令和元年五月一日現在）によりますと、小学校全学級数に対して複式学級数の割合が約二%以上を占めている県は一四県にのぼっています。逆に複式学級を有しない都道府県は、皆無です。すなわち小学校教員は全国のどこにあっても、複式学級における授業を展開することが求められています。

「複式学級における指導法」と聞きますと、何か特別なことをしなくてはならないような気がしてきます。しかし、「複式で指導する」というのは、「数学年の児童・生徒を一学級に編制することができる」（「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」第三条）に基づく行政措置であり、いわば大人の都合です。したがって、「複式指導」が目的ではなく、「言葉の力を育成する」ことが目的であり、この点においては単式学級と何ら変わりはありません。

また、「二学年分の教材研究が大変だ」という声も聞きますが、小学校国語科の学習指導要領には、指導内容が二学年まとまりで示されていますので、系統性が把握しやすく、効果的な教材研究が可能です。

二年間を見通した、言葉の力をつける国語科授業を展開する。この目的を見失うことなく、複式学級の国語科授業に取り組んでください。

Q2 複式学級指導の特徴は何ですか？

【解説】

複式学級の特徴は、複式指導で用いられる次の言葉が象徴しています。

直接指導	教師が児童に直接指導すること。
間接指導	教師のねらいに沿って、児童だけで学習を進めること。
わたり	直接指導をするために、一方の学年から他方の学年へ移動する教師の動きを、「わたり」という。
ずらし	四五分の中で直接指導と間接指導が停滞することなく展開できるように、指導過程をずらしていくことを「ずらし」という。例えば、授業の導入段階で、下学年が教師と一緒に学習のめあてを設定しているとき、上学年は児童だけで漢字テストや答え合わせをするなどの方法がある。
ガイド学習	児童の中から選ばれたガイド（学習の案内役）が、教師の指導のもと、教師に代わって前に出て進行する学習形態のこと。他の児童は、協力し合い学習を進めていく。

児童どうしが協力し合い、学習を進めていくことは、単式学級でも見られます。しかし、複式学級におけるガイド学習は、ほぼ教師の手を離れた場面で展開されるため、自主的な学習態度がより求められます。児童だけで学習内容を深めることが難しい場合がありますので、何を目標とするのか、確認することが必要です。

Q3 複式学級の学習指導には、どのような形態がありますか？

【解説】

学習形態には、大別すると、次の二つが考えられます。

- ① 学年別指導……学年ごとに学習指導を行う形態。
- ② 同単元指導……二つの学年を一つの学級として学習指導を行う形態。

「学年別指導」は、二つの学年を同じ時間に国語科と他教科を組み合わせたり、国語科の違う単元を組み合わせたりして指導する形態です。

一方、「同単元指導」は、二つの学年で同じ内容等を設定し指導する形態です。これは、さらに次のように細かく分けられます。

- ア 同単元だが、上・下学年それぞれの目標を設定して、指導する。
- イ 同じ内容・同じ学習目標を設定する。ただし、二つの学年の内容をA年度、B年度の二年間に分けて指導する。
- ウ 前述したア・イの両方の要素を取り入れて指導する。
- エ 二つの学年の内容を一年間で指導できるように、精選して年間指導計画を設定。これを二年間繰り返し返して指導する。

小学校国語科においては、学年別の教科書や単元別テストが多いことから、①「学年別指導」が多く見られます。また、教材によっては、②「同単元指導」で、同じ教材だが上・下学年の到達目標を分けて、学習活動を計画する実践もあります。

Q4 小学校国語科における一単位時間の展開として、どのようなことが考えられますか？

【解説】

まず、「言葉の力を育成する」授業であることを目的としてください。各学年の「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力、人間性等」で示された指導内容を、言語活動を通して具現化する授業構想が基本です。

次に、児童だけで授業を進めさせる「間接指導」においても、主体的・対話的で深い学びが展開されるように、次の工夫をすることが大切です。

- ① 学習内容の精選・話題の焦点化
- ② ガイド学習の習熟化（進行用話型の作成・活用、学習手順の明示・共有、学習リーダーの育成等）
- ③ 教材・教具の活用（児童用の小黒板の準備、デジタル教科書の配備、ICTの活用による他の学校との学び合い等）

※Q8でも触れています。

最後に、効果的な「わたり」と「ずらし」の計画を立てることが必要です。どれほど教育環境を整えても、小学校教師の指導に勝るものはありません。どの場面に関わるのか、どのように見守るのかを整理しておくことが大切です。

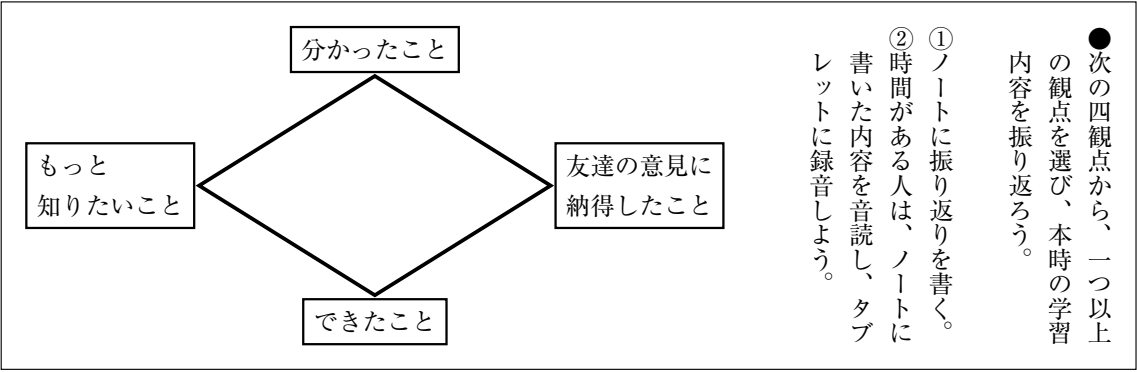
次のページの指導案①は一単位時間の雛型、指導案②は国語科授業の導入部分の例です。この実践では、一年生が学習のめあてをつかみ、学習の進め方を確認するところまでは、「直接指導」をしています。その間、二年生では漢字テストの実施や答え合わせを、学習リーダーの進行で行わせています。

この他にも、導入時に「前時の振り返り・発展問題」を組み込み「ずらす」方法がよく見られます。

※ 指導案① 複式・国語科授業 雛型

学習過程	学習活動 (下学年)	留意点	時間	学習活動 (上学年)	留意点	学習過程
見通す	1 めあてを立てる 2 手順を確かめる	・タブレット端末で学習計画表を確認し、本時のゴールをイメージする。 ・本時の学習の進め方や時間設定について確認する。	7分 直接指導 間接指導	1 前時で学習した内容や、新出漢字について確認する。	・教師は、前回の授業内容（知識・技能）や新出漢字について、タブレット端末を使用して、問題・正答を送信する。 ・児童は、解答後に各自で正答を確かめる。	振り返る (前時)
考える 深める	3 一人で考える 4 全員で意見交流する	・ワークシート、ノート、タブレットを選択・活用し、自分の考えを形成する。 ・迷っている児童に対しては、タブレット端末等を利用して、個別の支援を行う。 ・自他の考えをタブレット端末上で共有し、交流する。 ・学習が早く終わった場合は、A I ドリルやペーパーテストに取り組む。	7分 21分	2 学習課題を設定する 3 学習方法を確認する 4 一人で考える 5 全員で意見交流する	・ワークシート、ノート、タブレットを選択・活用し、自分の考えを形成する。 ・迷っている児童に対しては、タブレット端末等を利用して、個別の支援を行う。 ・自他の考えをタブレット端末上で共有し、交流する。 ・学習が早く終わった場合は、A I ドリルやペーパーテストに取り組む。	見通す 考える 深める
まとめる	5 本時の内容や自分の考えをまとめる	・教師と一緒に、学習内容（知識・技能）のまとめや、自分の考え（思考・判断・表現）をまとめる。	5分			
振り返る (本時)	6 本時の学習について、観点に沿って各自で振り返る	・四つの観点の中から、一つ以上の観点を選択して、本時の振り返りを書いたり、タブレット端末に音声記録をしたりする。	5分	6 本時の内容や自分の考えをまとめる 7 本時の学習について、観点に沿って各自で振り返る	・教師と一緒に、学習内容（知識・技能）のまとめや、自分の考え（思考・判断・表現）をまとめる。 ・四つの観点の中から、一つ以上の観点を選択して、本時の振り返りを書いたり、タブレット端末に音声記録をしたりする。	まとめる 振り返る (本時)

※ 振り返りの観点例（児童に示すために図式化した観点）



※ 指導案② 導入部分のみの紹介

1 本時の目標（※主目標のみ掲載）

【第1学年】

◎ 「エルフ」が年老いていく様子と「はく」の行動に着目して読む。

2 本時の実際

【第2学年】

◎ 「みき」と「ナニヌネノン」の行動や、そのような行動をとった理由を想像しながら読む。

主な学習活動【第1学年】	教師の位置と働きかけ			主な学習活動【第2学年】
1 学習のめあてをつかむ。 ・学習のめあてを設定する。	●直接指導	分	■間接指導	1 漢字テストをして、学習リーダーの進行で答え合わせをする。
2 学習の流れを確認する。	●はくの言動に注目させて、めあてを立てる。	4	■漢字テスト ■場面の通読後、該当箇所について考えさせる。	2 本時の場면을音読する。
3 本時の場면을音読する。	■ワークシートの説明。 ■傍線を引かせる。	4	●めあてを立てる。 ●学習リーダーが進めていけるように、学習の流れを確認する。	3 学習のめあてをつかむ。 4 学習の流れを確認する。
				どうして「みき」は、「ナニヌネノン」にリボンをあげたのかな。

Q5 「話すこと・聞くこと」の指導では、どんなことに気を付けるのでしょうか？

【解説】

複式学級の児童は、幼いときから同じコミュニティで過ごしてきている場合が多いと思われます。したがって、「話すこと・聞くこと」の指導でよく言われる「人間関係づくり」や「人前で話す抵抗感の軽減」等について留意することは、あまり多くないと思われます。

一方で、「いつものメンバー」だからこそ、留意したいことがあります。脈絡のない話しぶりや時間制限の超過等を許容してしまう雰囲気にならぬ「話す・聞く」を繰り返しても、公的な場面や大人数の前でのスピーチなど、他者性の高い集団においても適応できる言語能力には至りません。また、間接指導時の音声言語は、すぐ消えてなくなるため、教師の評価ができません。

このような状況を克服するために、多くの方法が考えられますが、ここでは次の二点について、工夫されることをお勧めします。

- ① 話す・聞く場面に多くの「人」を確保すること。
- ② プロセスを「記録」できる環境設定や学習活動を工夫すること。

①の「人」とは、学校内の教職員や保護者参観等の「大人の参加」も含みますが、同クラスの異学年児童も含みます。Q3で紹介した「同単元指導」で計画するとい良いでしょう。

また、②は視聴覚機器の活用や、スピーチ原稿を児童自身がポトフォリオとして累積することなどが大切です。

Q6 「書くこと」の指導では、どんなことに気をつけるとよいでしょうか？

【解説】

元来、「書くこと」は個人の活動です。しかし、学習指導上においては、児童一人一人の書く力を育成することが大切です。そのためには、「題材の設定」→「共有」の指導過程において、他者と対話する場面の設定が重要です。「この題材で書けるかな」「構成は分かりやすいかな」等、「書くこと」のプロセスにおいて、児童相互でアドバイスをする活動を計画してほしいと思います。

しかし、複式学級では、往々にして間接指導の活動として設定され、約三〇分近く児童任せにするという授業も見受けられます。その結果、個人差が大きく開いてしまい、「書くこと」が嫌いになった、という報告も聞きます。

人数が少ない中、他者との対話をどのようにして深められるのでしょうか。ここでは、大村はま氏の先行実践（『大村はま国語教室』第五巻、一九八三年）を参考にして作成した、「推敲」の手引きを紹介します。これは、自分で書いた文章をまず自分で読み直し、手引きに沿って記号を付けて友達に渡すことで、称賛や助言が得られやすくなる指導法です。最初は、対教師と行う様子をモデルとして紹介し、その後、間接指導でも実施することが可能です。

下段には、児童どうしで読み合い、アドバイスをし合う際のワークシート例を掲載しています。参考にしてください。

- 自分の作文に線を引いて、友達と交かんしよう。そして、良いところをほめたり、アドバイスをしたりしましょう。



わたしの作文「 」のとくちょう		
	観 点	内 容
1	特に読んでほしい人は、	() です。
2	特に伝えたいことは、	() です。
3	わたしの作文には、次のような記号がつけてあります。	
	① (何も書かない。)	このへんは、すらすら書けました。
	② ════════════	このへんは、よく書けました。
	③ × —————	このへんは、よく書けていません。
	④ ? —————	このへんは、自分の気持ちがぴったりしません。教えてください。

Q7 「読むこと」の指導では、どんなことに気をつけるとよいでしょうか？

【解説】

「読むこと」の指導では、「構造と内容の把握」や「精査・解釈」を経て「考えの形成」を行い、他者と「共有」することで自分の考えを深め広げさせることが大切です。

直接指導の時間が限られていますので、文意の「把握」や「解釈」を効果的に進めることが大切です。参考となるのは、教科書の巻頭に記載された「どうやって学んでいくのかな」（学習の進め方を記載したページ）です。令和六年度版教科書では、さらに分かりやすく記載されています。また、教科書巻末に「『たいせつ』のまとめ」があり、既習事項を確認することができます。ワークシート等作成の際には、これらの内容と関係づけることで、効果的な学習が展開できるでしょう。

「読むこと」の指導では、「対話的な学び」の実現も大切です。しかし複式学級では、クラスの人数が少ないために「対話的な学び」の実現が難しく、多様な考えが生まれにくいという声を聞きます。ただ、小学校学習指導要領解説総則編（平成二十九年七月）には、「対話的な学び」とは「教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること」でもあると書かれています。すなわち、学校ぐるみのサポートや学校図書館・公共図書館の利活用で、「対話的で深い学び」を実現することが考えられます。

お薦めは、並行読書です。例えば、光村図書六年単元「作品の世界を想像しながら読み、考えたことを伝え合おう」（教材 宮沢賢治「やまなし」）の学習で、資料「イーハトーヴの夢」と併せて、他の賢治作品を重ね読みするという指導法です。複式学級が少人数であることを生かし、学校図書館司書と連携を図ることで、児童一人一人が多くの関連図書と「対話する」ことが可能になります。

Q8 少人数での学びでも、多様な考え方に触れ、深い学びを実現するための教材・教具の工夫には、どのようなものが考えられますか？

【解説】

従来から使用されている教材・教具として、児童用の小黒板やホワイトボードの準備、国語辞典や漢字表などが挙げられます。また、一人一台端末が完了し、ICTを活用することで容易に遠隔地同士を結び交流することが可能になりました。ただし、道具を与えるだけでは、交流活動はあるものの、「深い学び」から離れてしまいます。教師は、教材・教具の準備にとどまらず、児童自らが教材・教具を使って学ぼうとする動機づけ・発問・指示について配慮していくことが大切です。教材・教具の準備と、適切な発問・指示を合わせて、「教材・教具の工夫」と捉えると良いでしょう。

例えば、光村六年の「視点や作品の構成に着目して読み、印象に残ったことを伝え合おう」（『帰り道』森絵都）には、二次元コードが付されています。間接指導時に「作品に対する作者の思いを聞いてまとめる」という目標を設定することで、児童は繰り返し動画を視聴し、教材の世界観を深めることができるでしょう。

定番教材の「ふきのとう」の二次元コードにアクセスすると、作者の工藤直子さんが読み聞かせをしてくれれます。二年生の児童にとっては、「他者に触れる」貴重な機会となるでしょう。児童には、「工藤さんの読み聞かせの後に続けて、声に出して読んでみましょう。」と投げかけ、音読練習へとつなげてください。

教科書には、作者・筆者のインタビュー動画、言語活動の参考となる動画、教材に関する写真・資料等、多くの二次元コードが準備されています。学習計画に配置し、適切な発問・指示によって、多様な考え方に触れられるような「工夫」をしてください。

Q9 少人数での学びでも、語彙力・表現力を高めるためには、どのような工夫をするとういでしょうか？

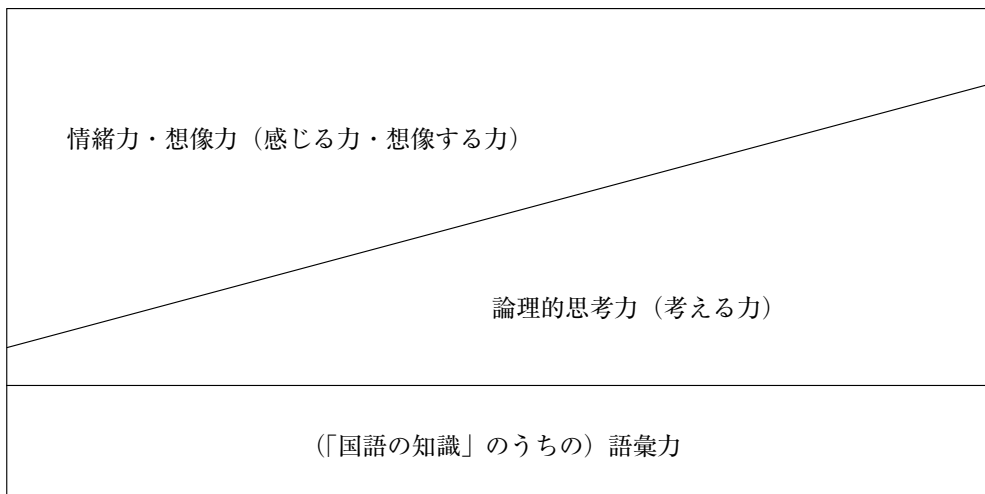
【解説】

下図は、「これからの時代に求められる国語力について」（文部科学省、文化審議会、平成十六年）で示されたものです。これは三歳までの乳幼児期から青年期を時間軸として、国語教育における重点の置き方を図に表したものです。また、脚注には「表現力（表す力）」は上図の「情緒力・想像力」「論理的思考力」「語彙力」のすべてに関連するので、図から外してあります。すなわち全ての学校教育においては、学校ぐるみで語彙力・表現力の向上を図るべきであることが分かります。

少人数のよさを生かした全校の取り組みとしては、各教室への国語辞典の貸し出し、上学年による読み聞かせ、音読・朗読集会や意見発表会等、言葉の「入力」と「出力」を全校参加の形で、バランスよく設定することが可能です。

ここでは、全校で取り組む「日直作文」の例を紹介します。これは、今日一日の出来事を題材として、日直が黒板に作文を書くというものです。放課後の時間を利用して、原稿用紙形式の黒板に、短時間で書き上げます。翌朝、朝の会の時間に紹介され、二学年が一緒になって感想を伝えます。良かったところ、疑問に思った言葉、まず目の使い方……等、児童は六年間を通して、多様な作文に触れ、語彙力・表現力を高めていくことができます。マンネリ化を防ぐために、教師からテーマや書き出し等の条件を付けることもあります。また、国語科学習の内容に応じて、詩や俳句といった韻文を指定することもあります。少人数だからこそ磨き合うことができる「日直作文」、ご一考ください。

発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」のイメージ図



乳幼児期→

青年期

※ 表現力（表す力）は上図の「情緒力・想像力」「論理的思考力」「語彙力」のすべてに関連するので、図から外してある。

Q10 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、複式学級指導で特に配慮すべきことはありますか？

【解説】

新学習指導要領下の国語科授業は、言葉による見方・考え方を働かせて、主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を育む授業を実現していく必要があります。これまでのQ&Aの中では、複式学級の特性から「対話的で深い学び」に重点を置いて解説してきましたが、少人数学級において児童が「主体的で深い学び」へと向かうことは、大前提です。よく「複式学級では主体性が育まれる」と聞きますが、そこには丁寧な指導が必須です。

例えば、見通しをもって学習に取り組ませるには、学習を進めるマニュアルが必要です。令和二年度版教科書には、二年以上の巻頭に「学習の進め方」が配置されていますので、参考にしてください。

また、自己の学習活動を振り返り、次につなげさせることが大切です。デジタル・ポートフォリオなどの電子化された設備があればよいのですが、すぐに実践できることとして、「学習計画表」の活用があります。本单元への時間配分、学習ゴールのイメージ、評価の方法等、学習全体の計画を把握することにより、児童の取り組み姿勢が変容していきます。以前、小規模校において二つの学年の児童が、それぞれの学習計画表をホワイトボードに書き、毎時間の学習のまとめを児童自ら書き加えていくという実践を見たことがあります。自らの手で、学習を管理し進行していることを可視化することで、喜びをもって学習に取り組む姿勢が印象的でした。

他にも、複数のワークシートを準備し児童自ら選択させる工夫、表現モデルの蓄積、小黒板やホワイトボードの準備などを心がけていくことが大切です。

Q11 現在、「個別最適な学びと協働的な学びの実現」が強調されていますが、複式学級において実現することが可能ですか。

【解説】

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）（令和三年一月中央教育審議会）には、ICTの最大限の活用を図りつつ、「個別最適な学び」と、「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められました。「答申」を読み進めると、基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させる「指導の個別化」と、子供自身で学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」が、子供同士・多様な他者と協働する「協働的な学び」と一体化することで、主体的・対話的で深い学びの実現を図ることが求められていることが分かります。

一読すると、実現が難しいようにも思いますが、Q2及びQ4で解説した内容を思い出してください。基礎的・基本的な知識・技能等を習得させる「直接指導」、児童だけで学習を調整しまとめていく「間接指導」、そしてICTを活用した他学校との学び合い……。正に、『個別最適な学び』と、『協働的な学び』の一体的な充実」という理念が、複式授業において具現化されていることに気付かれると思います。複式学級ではできない、ではなく、複式授業指導法こそが、今、求められているのです。例えば次の視点から、複式授業の良さを再認識できるでしょう。

- ① 学習課題・計画とゴールを全員が把握している授業
- ② ①に基づく学習方略や言語活動に、全員が取り組む授業
- ③ 子供自身で時間管理や学習環境の選択を行える授業
- ④ 学習の記録に基づく自己評価ができる授業
- ⑤ 学習成果に対する教師のフィードバックができる授業